

file 2

創造文化フォーラム



前ページ写真提供：仙台商工会議所

スペイン・バルセロナ調査報告

——文化の異種交配・混交によるクレオールシティの試み——

志賀野桂一*

Survey Report on Barcelona as a 'Creole City'

SHIGANO Keiichi

1 調査目的

芸術文化の創造性を産業に活かし衰退した都市を再生させる「創造都市論」が世界レベルで注目されるようになって久しい。また文化の多様性に着目したユネスコの創造都市ネットワーク登録制度も生まれ、日本では神戸、名古屋、金沢が登録を果たし、世界で現在 25 都市（2010 年現在）を数えている。さらに、2008 年から始まった文化芸術創造都市部門・文化庁長官表彰では、2010 年に仙台市、東川町、中之条町、別府市の 4 都市が受賞した。EU の創造都市の代表的な例としては、ボローニャ（イタリア）、ナント（フランス）、ビルバオ（スペイン）、グラスゴー（イギリス）などが挙げられ、いずれも、音楽や美術といった芸術文化をテコとして都市再生を果たし、成果を収めている都市である。バルセロナは EU 創造都市のなかでもとりわけ成功したモデル都市として注目を浴びているが、その特色と秘密の源泉を探ることが本章の目的である。

バルセロナはスペイン国にあってカタルーニャ語という言語を有し、独自

* 東北文化学園大学総合政策学部教授

の文化を形成している自治州の州都である。また歴史的には、フランコ独裁体制による国際的な孤立が1975年まで続き、1979年にカタルーニャ州の自治権が承認されたことによって現代的な発展がなされた地域である。この30年余りの短い歴史のなかで、オリンピック開催などを通じ、急激に発展を遂げ、EU諸国の週末観光の最も高い人気を誇り、留学生の急増や観光産業など成長著しい都市となっている。またバルセロナは、ムンタネール、ガウディなどのモデルニスモ様式といった特色ある建築群がユネスコ世界遺産に指定されているほかピカソ、ミロ、ダリ、タピエスといった多彩な芸術家を輩出した芸術都市として知られている。

都市計画は、繊維産業や貿易で栄えた19世紀半ばにその骨格がつくられ今日に続いている。しかし、その見直しと新しい都市づくりが本格化したのは民主化以降で、今日的なカタルーニャ文化をベースとするバルセロナ固有の創造都市政策は、90年代後半から今世紀にかけて行われてきたとみることができる。この10年間の飛躍は目覚ましいものがある。本章では、先行研究の太下義之「創造都市バルセロナの文化政策」(太下[2008])や阿部大輔『バルセロナ旧市街の再生戦略』(阿部[2009])をベースに、筆者の独自の視点を加えながら分析を進めてみたい。

また、カスティーヤ州のマドリッド市などとも比較し、今日的文化政策と都市政策の関係を明らかにするとともに、バルセロナという都市を分析し、都市の「文化的基層」(都市の創造エネルギーや潜在力の源泉)と政策との関係をあきらかにしていきたい。

2 調査対象と調査方法

調査対象としたのは、バルセロナ市のシンボルであるカタルーニャの精神を根幹から支える文化的な基層となっているガウディの建築群と、その双璧を成す建築家ムンタネールのカタルーニャ音楽堂やサン・パウ病院などである。いずれもユネスコ世界遺産に指定されている数々の建築文化遺産である。またカタルーニャ縁の芸術家の美術館、オペラハウス、劇場・ホールなどである。

バルセロナ市の都市計画は、イ. 旧市街地区、ロ. 拡張地区(19世紀に開発)、ハ. 新興開発地区の大きく3つの地区に分かれ、それぞれ異なる戦

写真1 グラシヤス通りの現代建築(左)とミラ邸(右)



略が与えられていると考えられる。今回は主に旧市街のラバル地区、ゴシック地区、カスク・アンティーク地区の3地区と拡張地区に点在するモデルニスモの建築群を調査した。とくにラバル地区は図書館、現代美術館(MACBA)や現代文化センター(CCCB)やアートデザイン財団(FAD)リセウ大劇場(オペラハウス)などの文化施設をはじめ、ラバル遊歩道など整備が進んでおり、「エスポンハミエント(esponjamiento)」と呼ばれる、街区に小さな多孔をあけて環境を良くする整備手法がどこまで生きているかの確認を行った。

それらの変化する都市づくりと市民生活がどのようにつながっているのか、バルセロナ市の新しい文化戦略を策定し文化政策の最前線で活躍しているバルセロナ文化協会局長のジョルディ・パスカル氏にヒアリングし、バルセロナ市の新しい文化戦略「新アクセント2006」の進捗状況、文化・芸術事業やそれらに関する施設との関係性、文化と経済、都市計画、創造都市の考え方などについてヒアリング調査を行った。

新興開発地区に関しては、新たな革新的なデザインによる建築と地区計画などが都市の外延部で進んでいるが、先行研究の太下[2008]や遠藤陽子(仙台市)の調査報告(遠藤[2009])を参考として考察した。創造的産業の振興について、産業革命以降の1860年代から1960年頃にかけて、繊維産業を中心とした工業地域だったカタルーニャのマンチェスターと呼ばれたほどに繁栄し、その後公害やスペース不足などの問題により衰退していった22@Barcelonaなど、復興著しいポブレノウ地区や、先端産業の拠点として

再開発され注目を浴びているジローナ市がある。こうしたメディアや ICT 産業などの創造的産業が、バルセロナという芸術・観光都市のなかで果たしている役割などについて考察した。

3 バルセロナ市の概要と現在

バルセロナ市はマドリッド市に次ぐ人口を擁し、カタルーニャ州の州都で、スペイン最大の経済都市である。面積は 100.4km²、人口約 161 万人（2006）で、広域経済圏では人口 477 万人となる。2000 年以降、移民の数が 36 万人と急増し市内に住む人の約 14% を占めている。2000 年から「新外国人法」が適用されている。観光客は表 1 のとおり、1990 年の 170 万人から 2006 年 670 万人と大幅に増加している。また、「(ビジネスマンにとって) 欧州で最も生活環境の良い都市第 1 位」に、1996 年より 12 年連続して選ばれているほか、「欧州におけるビジネス立地ランキング」においてはロンドン、パリ、フランクフルトに次いで 4 位の位置を占めるなど、20 世紀末からその飛躍ぶりには顕著なものがある。

同市は芸術文化都市としても有名である。ピカソ、ミロ、ダリ、タピエスなど多くの芸術家を輩出しているほか、ガウディやムンタネールなどの建築家によるモデルニスモ様式建築群が数多く点在し、独特の都市景観をつくっている。それらのうち 9 つがユネスコの世界遺産の指定を受け¹⁾、このうち

表 1 急増するバルセロナの観光客

	観光客	宿泊客
1990 年	173 万人	379 万人
1995 年	308 万人	567 万人
2000 年	314 万人 (181)	777 万人 (205)
2004 年	454 万人	1,024 万人
2005 年	506 万人 (292)	1,094 万人 (288)
2006 年	670 万人 (387)	1,319 万人 (348)

注 1) () は 1990 年を 100 とした場合の数字である。

注 2) バルセロナは観光客増加率の EU で最も高い都市 (European Tourism Leader Benchmark) である。

1) ①ラ・ベドレラ (ミラ邸)、②グエル公園、③グエル邸、④カタルーニャ音楽堂、⑤サンタ・クレウ・サン・パウ病院、⑥サグラダ・ファミリア教会、⑦パトヨー邸、⑧ピセンス邸、⑨コロナ・グエル地下礼拝堂の世界遺産、④⑤以外はすべてガウディの仕事である。

7つがガウディの作品である。ガウディはマジョルカ島のカテドラルなどを除き、バルセロナ以外の都市で作品を残していないこともあって、バルセロナは「世界で唯一ガウディに会える都市」という優位性を保ち続けているのである。コーエンの観光概念²⁾でいえば、演出された真正性 (Staged Authenticity) を作り出すということになるが、丁寧な修復の継続と後述する「ミュージアム化」によって観光資源としての価値を高めているのである。

市の沿革は遡ること3世紀に築かれた都市といわれる。城壁のあった旧市街地、繊維産業や貿易などで栄え19世紀に拡張された市街地 (以下拡張地区とする)、さらに市域東西のベリス市やオスピタレット市など新興の都市街区を加え、バルセロナ大都市圏を形成して発展を続けている。しかしその歩みは順調ではなく、1936-1939年の内戦、その後36年間にわたるフランコ独裁化でカタルーニャの自治権や言語や文化が禁止されるなど圧政下で都市は衰退した。たとえば、バルセロナには日曜日ごとに、大人から子供までみんなで輪になって手をつなぎながら踊るサルダーナという踊りがある。その起源は古代ギリシアにさかのぼるといわれ、カタルーニャ人にとってこの

写真2 サグラダ・ファミリア教会 (左) とトーレス・ポルタ・フィラ：伊藤豊雄 (右)



2) 社会学者コーエンは観光客側から見た観光状況を、4つの状況、すなわち①真正性 (Authenticity)、②演出された真正性 (Staged Authenticity)、③真正性の否定 (Denial Authenticity)、④人為的 (Contrived) で説明している。北川 [2004] を参照。

サルダーナは民族を自覚できる大切な文化のシンボルであった。しかし、フランコ独裁政権の時代にはカタルーニャの民族意識を高揚させる芸能としてカタルーニャ語と同様に禁止された。

今日発展の礎は、1975年にフランコ政権が滅び、1977年総選挙が41年ぶりに行われ1978年に新憲法ができた民主化以降である。

成果でとくに注目すべきは、それまで住環境・治安の悪化などで活用が困難であった歴史的街区の再生手法である。また拡張地区に点在するモデルニスモ様式建築群の再評価と修復などにより、他にない都市の魅力を増すことに成功している。加えて新都市街区における創造産業にも力を入れはじめ、大胆な都市構造の全貌が見え始めている。最近できた伊東豊雄の設計によるトーレス・ポルタ・フィラタワーなどのランドマークとなる建築群が、都市の新たな顔として姿を見せ始めている。これらの建築物はそれぞれ国際的建築家の設計によるものだが、ガウディなどの築いてきたモデルニスモ様式の建築群とは、不思議に共通する特徴（コード）を感じさせられる。

「創造都市」を支える3つの要素として、①創造の場（空間）、②創造的人間の集積、③創造の機会（事業）が不可欠といわれる。バルセロナの場合は、これら3つの要素が街に溢れ、ユネスコ創造都市に加盟・登録してはいないが、カタルーニャ主義ともいべき固有の文化土壌を大切にしながら独自の政策を行っている創造都市となっているといえる。

4 バルセロナ市の文化政策

まず、バルセロナ市の文化政策に関する近年の動きを見てみよう。文化政策の歴史は次のようにまとめられる。現在は新しい段階（第4期）に入っていると考えられる。

第1期 1979-1986「フランコ独裁を経て民主化の回復から文化の回復へ」
この時代に「市民センター」が計42カ所設置された、このうち約半数は都心部以外に配置され、都心部と郊外との文化的連携が図られた。

第2期 1987-1995「オリンピックと大規模文化施設の整備へ」

この時期は、オリンピックを通じて国際的なアピールが行われ、都市整備

では、リセウ大劇場の復興、カタルーニャ音楽堂の拡張「CCCB」「MACBA」など現代美術館の建設がなされた。

第3期 1996-2005「文化戦略計画から世界発信へ」

ここでは「バルセロナ文化研究所」が設置された。1999年、初めての文化政策「Barcelona Strategic Plan」が策定された。バルセロナ・アートレポート 2001年トリエンナーレ展が開催された。2002年ガウディ・イヤー開催、2004年には、「世界文化フォーラム」が開催された。

第4期 2006-現在「新しい文化戦略の再構築と実行へ」

3つの時期を経て、新しい文化戦略「Barcelona Strategic Plan New accents 2006」(2006-2015)全体で10分野の政策、合計69の施策・事業で構成されている。

市の文化予算(2006)は1億3,547万ユーロ(約150億円)で、全体予算に占める割合は6.2%である。フランスのナント市6,755万ユーロ(全体予算の15.6%)などと比較すると、金額は大きいが全体予算の占める割合はそれほど大きくはない。1999年にできた戦略プラン(2010年までの目標)は、大型の文化施設の改修などがすでに達成されたことから早めに見直しが見られ、現在は「バルセロナ戦略計画 新アクセント2006」(Barcelona City Council [2006])を基に政策が進められている。

計画は10の戦略的柱からなっている。1. バルセロナ文化研究所、2. 文化、教育およびProximity、3. 読書都市バルセロナ、4. 異文化交流のためのプログラム、5. バルセロナ科学、6. 文化施設の質、7. 知識、記憶および都市、8. バルセロナ文化的資本、9. 文化の接続性、10. バルセロナ芸術文化評議会、である。さらに69の細目プログラムがつくられている。この計画は、日本の見地からすると、机上プランとして決して美しい体系になっているとはいえない。細目はさらに複雑で、ここに流れる政策の骨子を読み取ることはなかなか困難である。日本ではともすると計画の整合性に執心する傾向が強いが、バルセロナでは、まちづくりは「計画からプロジェクトへ!」という、バルセロナ市都市計画局長オリオル・ボイガス(Oriol Bohigas)氏が掲げたスローガンのように、実行の出口から発想していると思われる。この観点でいくつか特徴的な項目を拾い出し再編集して見ると、次第に見え

てくる文脈がある。筆者はそれを、下記の4つの政策コンセプトに再編集できると考えた。

4.1 4つの政策コンセプト

- A 都市のアイデンティティと記憶の再生のための施策
……〈バルセロナ固有性の再発見と活用〉,
- B 古い都市インフラの再生・転用（コンバージョン）施策
……〈再生のためのインフラ整備〉,
- C 文化芸術活動の支援のための中間組織・ネットワーク施策
……〈実現のためのソフト事業〉,
- D 芸術と科学や産業などの新領域に対する投資的な施策
……〈新しい文化シーズの導入と交配〉,

これらの政策コンセプトは、つぎのように構造的でスパイラル状に連続している。

- A バルセロナ固有性の発見と活用→B 再生のためのインフラ整備→
- C 実現のためのソフト事業+D 新しいシーズの導入と交配→
- A' さらなる固有性の再発見と活用

というスパイラルである。バルセロナの特徴である異種の文化や考えを取り込み、混交しながら進化してきた過程として迎えることができる。

では、具体的プロジェクトを拾いだしてみよう。

コンセプト A はまさにバルセロナのアイデンティティを掘り起こしていく施策である。ここではカタルーニャ語受容ための「言語受容センター」、*「ユダヤ・バルセロナ・ミュージアム」*、カタルーニャ文学の先駆者、詩人ホアン・ブロッサ（Joan Brossa, 1919-1998）の顕彰基金、地中海とラテンアメリカ国際協力事業、ピレイナ宮のイメージセンター、グエル公園の保存・回復、カタルーニャ音楽堂の改装・増築などがあげられる。ここで筆者は、カタルーニャ語に関する「言語受容センター」事業などに、政治的影も感じる。自治州の現政権が左派3党で構成されていることもあり、カタルーニャ・ナ

シヨナリズムが強い。しかし歴史を辿れば、1890年代カタルーニャ・ルネッサンス（ラナシェンサ）と呼ばれる運動、つまりカタルーニャ語の復活と認証を求める運動に由来するバルセロナの歴史を貫く事業として見ることもできる。

コンセプト B では、Poblenou 地区にあるサラドリノガの工場跡の「産業遺産ミュージアム」への転用、古い商業ビルの転用による「ボン文化センター」、セサビル改装によるマジックの文化施設、内戦防空壕の改装、旧計画のラルバル地区の CCCB や病院の図書館への転用、リセウ劇場の再生などがあげられる（建築文化の保存・回復・メンテナンスおよび調査・研究の実施を含む）。これらは古い都市資源を廃棄することなく活用させるハード面の施策群である。

コンセプト C は、A、B を機能させるソフトの事業が中心で、プロとアマの中間領域の舞台芸術の訓練施設、アートマネジメントの支援、カタルーニャ州の各地にある文化施設をインターネットでつなぎ、オンラインで共同イベントや研究を実施するカルチュラル・リング（Cultural Ring）³⁾ というプロジェクト活動を調査する事業や、ピカソ美術館のアーカイブを充実させる事業、小サーカス団に対する教育、育成に特化した支援事業などきめ細かなプロジェクトが並ぶ。

コンセプト D は、マルチメディアセンターに見られるデジタル技術を駆使したモバイル芸術、バイオ芸術、ロボット芸術などへの投資である。また、市のドキュメンタリー遺産へのヴァーチャル・ネットワークが盛り込まれている。このような新分野の文化事業も果敢に取り込む姿勢が見える。

4.2 文化資源のミュージアム化

とくに筆者が目にする事業は、ピカソ美術館のアーカイブの充実などに代

3) カルチュラル・リング（Cultural Ring）という活動は CCCB で行われており、これは市内のリセウ劇場などの文化施設をはじめ、カタルーニャ州の各地にある文化施設をインターネットでつなぎ、オンラインで共同イベントや研究を実施するというものである。この事業は、各文化施設のほか、バルセロナメディア財団にも籍を置くボンベウファブラ大学やテレビ局のメディアプロ、通信機器販売会社のアルカテル・ルーセント、カタルーニャ州政府などによる財団「i2CAT」との共同事業で、現在では、すでに一部のネットワークが構築され、ネットワークを介したワークショップやセミナー、コンサートなどが開催されている。

表される、バルセロナのさまざまな文化資源のミュージアム化の促進についてである。パスカル文化局長は「ゲエル公園の有料化に早急に取り組む」ことに言及した。筆者が考える「ミュージアム化」とは、既存建築物を文化遺産として研究・調査・整理し、①アーカイブ化と文化機関化を進め、そして②公開化とネットワーク化を図る。いいかえれば、文化遺産の③産業化・観光化である（ルート化や有料化も含む）。ここでの観光化はあくまで必然性のある施策（コーエンのいう真正性がある観光）であって、単なる人為的な人集め策ではない。こうした取り組みが、民間企業・団体にも波及しており、カサ・パトヨー邸の恒常的公開なども事例の1つに数えられる。

4.3 都市は万人のためにある

「新アクセント 2006」の進捗状況を局長のジョルディ・パスカル氏に尋ねると、そのすべては進行中で完成形は常に先にあるという。その口ぶりには余裕さを感じられる。またこれらの政策を進めるバルセロナ市の基本姿勢は、「バルセロナ市民フォルダ」⁴⁾ サービスに見られるように、プランづくりや評価の過程において形式的な市民参加ではない市民主権が貫かれているのが大きな特徴となっている。

文化政策の大きな文脈は前述のコンセプト A→B→C→D の通りだが、新戦略の「アクセント」、すなわち重点は多様なコミュニティレベルの文化活動が明記され、市民協働によるきめ細かな計画と実行が謳われている点であろう。文化施設に関してリセウ大劇場の再建、世界遺産のカタルーニャ音楽堂、美術館（MNAC）などすでに工事が完成し、これまで光の当たってこなかった分野の多彩な事業と、「ミュージアム化」手法に見られる常在資源の磨きあげに新しい戦略の「アクセント」があると筆者は感じたのである。

また、政策立案及び実施に際して、筆者はかねてより文化統合による政策手法「カルチュラル・クロスポリシー」⁵⁾ を提案している。バルセロナの文

4) 市民のデータを明確にフォルダとして管理し、情報コントロール権を市民が行使できるよう運用している。

5) カルチュラル・クロスポリシー（Cultural Cross Policy）とは、「多様な都市問題や都市課題を解決しようとするために、文化芸術の持つ多義的アイディアや発想、触媒作用に着目し、施策立案および実施過程において、省庁や部局で自己完結的に行うのではなく、文化部局や文化芸術関係者との協働によって従来型の目的合理的発想から価値統合的な合意の形成のもとで、文化施策と諸施策を総合的に実施していく手法」とする。

化協会ではすでに自然体でこうした考えで政策に取り組んでいるように感じられた。

では個別の文化施設について見てみよう。

4.4 CCCB と MACBA

これは、バルセロナ現代文化センターとバルセロナ現代美術館の略称である。いずれも旧市街地の治安の悪い地区として知られるラバル地区の中心に整備された。

CCCB は 1994 年に開設した文化センターで、展示のほか、音楽や演劇、映画の公演、文化に関するセミナーなどが実施されている。現代美術館で扱わないすべてを対象とするというきわめて自由度の高い活動方針のもとで、MACBA とのすみ分けが図られている。市街地中心部に位置し、建物は内部に中庭を有するロ字型で、もともと孤児院だったものを、開設にあたり内部を中心に現代的に改装されたものである。施設内には、展示室の他、ミニシアター、展示のアーカイブ、資料室、市民貸出用会議室、ブックストア、カフェ、バーなどが併設されている。筆者が訪問した時の展示は、「迷路」をテーマとしたコンテンポラリーな企画展であった。単なるアートを超えて、迷路の歴史、造園、建築、生物、自然物などをひとつの切り口で編集して見せてくれる展覧会であった。

CCCB の運営は、バルセロナ県・市による共同体で運営され、予算年間約 18 億円の大部分は県・市・州の補助金で賄われており、入場料収入の寄与率はわずか 6 % である。

年間に 5 つ程度のテーマで展示が行われ、展示制作は、展示ごとにコーディ



写真 3 CCCB の迷路をテーマにした展覧会より

ネーター（担当責任者）がローテーションで担当している。また、展示テーマはスタッフの仕事だが、一般市民やアーティストからアイデアが寄せられるなど、外部の企画が形になった展示もある。入場者数はのべ40万人を数えている。

CCCBでは、展示のほかに、公演やセミナーも多数開催されている。展示、公演、セミナーのすべてを通して、CCCBで行われる活動のテーマは「現代文化へ訴えるもの」ということで統一されている。

一方、MACBAはリチャード・マイヤーの設計で1995年に開館し、その白い箱はこの地区の古い佇まいと対照的な趣である。ビルバオのグッケンハイム美術館など比較すると、そのインパクトは弱く、広場のレイアウト、景観などを含めて、市の成功モデルとはいえない建物であると筆者は感じた。しかし展示のなかにこの美術館が建設される過程のドキュメント映像が流されており、サン・パウ病院のエントランスホールなど多くの文化施設も同様のアーカイブとその映像が公開されている。バルセロナのまちづくりに対する市民コンセンサスづくりの徹底ぶりを見る思いであった。展示は20世紀後半から現代まで、運営は市と州、財団の共同体である。予算は約15億円余となっている。

4.5 カタルーニャ音楽堂

このホールは世界遺産にも指定され、モデルニスモ様式の建築家ドメネック・イ・モンタネールの傑作といわれる。施設の概要は大ホールが2,146席あり、3層バルコニーのシューボックス形である⁶⁾。20世紀初頭に建設され、

写真4 現代美術館 MACBA



写真5 世界遺産のカタルーニャ音楽堂



基本の仕様は建設時のままであるが、1989年に拡張され地下に500席の小ホールが追加されている。年間300公演のほとんどが満席という状況にある。

この音楽堂の優れている点をいくつかあげると、ウィーンのムジークフェライン以上に外光が入り明るいことや、音響面での工夫が凝らされ、椅子も人間工学に照らした設計で驚くほどすわり心地が良い。内装の好き嫌いはあっても鉄とガラスと木の絢爛豪華なモデルニスム様式の多色装飾に圧倒される。建設当時には存在しなかったクロークや大きなエントランスのたまり場などが改良されている。しかし、拡張は当初の様式を尊重しながら最小限の手入れにとどめている。ソフト面では、20世紀初頭のカタルーニャの有産階級が抱いていた野心、つまりカタルーニャ主義（郷土愛）と国際文化との合流という思想が貫かれ、クラシックのみならず、ジャズ、ダンス、など多様な音楽・舞台公演が毎日のように行われている。施設のみの見学ツアー客も多く、筆者もそのレクチャーツアーに参加した。

年間プログラムを見ても建設当時の考えが踏襲されていることは特筆に値する。ここで聴く音楽はどんなに素晴らしいかを期待させ観光客の誘客装置の1つになっている。カタルーニャ主義とその風土と独自の精神性を象徴するハードとソフトの合体がカタルーニャ音楽堂に見られるのである。

4.6 リセウ大劇場（オペラハウス）

1847年開館の、スカラ座とならぶ伝統のある歌劇場で、観客席は2,300席余である。ランブラス通りに面したラバル地区にある。これまで2度の火災やテロの攻撃に見舞われた苦難の歴史があり、その度ごとに再建されてきた（イタリア・ベニスのフェニーチェ劇場も2度の火災から蘇ったという）。リセウ大劇場は、2度の火災で壊滅的な打撃を受けたにもかかわらず1994年に再生復活を果たしている。再建に当たっては多くの市民のみならず、ドミンゴなど世界的オペラ歌手からも寄付が寄せられ、その銘板が飾ってある。EU諸都市の歌劇場はいわば都市のシンボルとして町の中心に位置することが多く、オペラハウスと市庁舎が広場を挟み建っている例は多い。階級社会の側面を持つ歌劇場であるが、リセウ劇場の場合、象徴的な王侯のための特

6) 文字どおり靴箱の形状からその名がついている。側方からの音響が豊かとされる。この音楽堂は角はやや曲線で変形のシューボックス型である。

別席は設けられていない。筆者がバックヤードツアーに参加した時はフランクフルトバレエ団の仕込みの真最中で、こうした EU の著名なバレエやオペラが年間スケジュールに組まれている。富裕層向けの文化施設であることは否めないが、歌劇場側も地区住民の無料での劇場見学や、招待枠（1 興行 200 人）を設けるなど、トット・ラバル財団（まちづくりの NPO 法人）と協定を結んで地域との融和策を行っているのである。

5 バルセロナの文化基層を探る

ルカ・グランドーリは、「711 年アフリカから海峡を越えてやってきたムーア人が斬新な建築の街を築き謹厳なカトリック王国に情熱を持ち込んだ」⁷⁾と述べている。バルセロナの町の建設は 3 世紀のカルタゴ人によるとされるが、スペインの基底をなす文化構造を解析すると、古代ローマの属州としてのローマ文化、イスラム文化、キリスト教文化（ユダヤ教も含む？）に、古くはアフリカ文化も含めた融合文化があり、まさにクレオールである。スペインの歴史はレコンキスタと呼ばれる。キリスト教徒がイスラム教徒をイベリア半島から追い出す歴史とされる。しかし、政治的な側面で異教徒を追い出しても、文化はしっかり根づいている。むしろ今にいたるまでイスラムの影響は大きく、スペインの血肉となっているのである。その証拠は、スペイン全土に存在する「イスパノアラベ（スペイン＝アラブ）美術」様式に見ることができる。

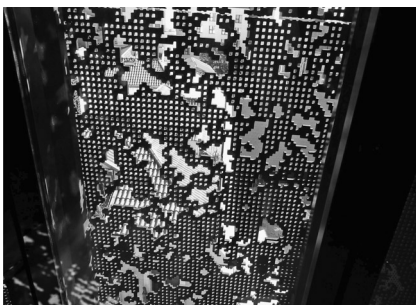


写真6 カイシャ・フォーラムの外装
（イスパノアラベ模様）

7) 『DOVE』Vol.7 スペイン（1999年2月、旺文社）を参照

マドリッド市の中心部プラド美術館の向かいにカイシャ・フォーラム (Caixa Forum)⁸⁾ というアートギャラリーがある。この建物のファサードは現代アーティスト、パトリック・ブラン作の植物の壁となっており、内部空間は現代アートそのものだが、透かし彫りの外壁がなかから見るとアラベスク模様に見える。こうした現代建築にもイスラム文化の浸透が見られる。

フラメンコの由来も一説にはアラブ語 *felag mengu* のなまりだという。ムーア人の追放をロマ人たちが述懐しているのだともいわれている。ラメント(哀愁)と激しい感情の交錯がこの民族芸能を特色づけている。

各所で出会うさまざまな文化芸術に見られる「クレオール主義」⁹⁾ ともいふべき異なる性格の混在と同居は、バルセロナの共通の特徴である。

こうした前史を持ちながら、バルセロナ市がバルセロナらしい輝きを放ったのは、19世紀繊維産業と貿易で栄えた時代の富を背景に19世紀末から20世紀にかけて起こったモデルニスモの運動である。活躍したのがドメネック・ムンタネール、ジョゼップ・プッチ・イ・カダファルクでありアントニー・ガウディであった。代表的建物にラ・ペドレラ(ミラ邸)、パトヨー邸、ピセンス邸、グエル公園、グエル邸、カルベ邸、フィゲールス邸、カタルーニャ音楽堂、サンタ・クレウ・サン・パウ病院、サグラダ・ファミリア教会、などがある。

モデルニスモはいうまでもなくアール・ヌーボー運動のスペイン版ともいわれる。それはカタルーニャ州都バルセロナ市という独自の文化圏のなかで色濃く凝縮され、経済の隆盛とブルジョア階級の卓越意識から生まれた現象であり、スペイン国家に対するカタルーニャ主権運動という政治的性格も併せ持つ運動であった。

5.1 ガウディ

アントニー・ガウディ (1852-1926) はバルセロナの代名詞となっている¹⁰⁾。同時代のモデルニスモ建築家のなかでも時代を突き抜けて今に大きな

8) バルセロナにもコスモ・カイシャがある。これは今までの美術館、博物館の概念を変えた建物で、カダファルク設計・元繊維工場で、日本の建築家、磯崎新の改装によって再生された。

9) クレオールとは、混合の民、混血の文化、混種の言葉を意味する。今福 [2001] を参照。

10) ちなみにガウディに関して、20本以上の映画、2,000以上の論文、60以上の著作、60回以上の展覧会が行われている。丹下 [1978] による。

影響を与え続けているのが、このガウディである。筆者はムンタネールが持つ華麗な装飾美に対して、ガウディの現代性とディテールの新奇さに魅了される。その生涯をたどると、釜師（金属細工の職人）の息子として生まれ、建築家として輝かしい時代を経て、聖家族教会に捧げた晩年、そして電車で轢かれて死ぬまでの個人史に興味は尽きないものがある。ガウディを特色づける自然主義、モザイクタイルの色彩感覚、ムデハール様式からアラベスクなど折衷主義といえる多様な様式が交錯している。しかし、出世作といわれるビセンス邸からゲエル邸、ペドレラ邸、サグラダ・ファミリア教会という流れのなかで、様式との決別と変遷が見られる。一般にいわれる自然主義は確かにガウディの特徴ではあるが、晩年は無遠慮なまでに獲得した幾多の様式を捨て去っている。またサグラダ・ファミリア教会ほかで使われた構造計算に代わる「ケーブル模型」や、ゲエル公園の貯水と排水の意匠からは科学的創造性が感じられる。バルセロナの風土性はモンセラット山に代表されるといわれ、ガウディのイメージの源泉もまたこうした自然のモチーフにあったと想像されるが、美学的デザイン論だけでは説明がつかないのである。

5.2 パトヨー邸

パトヨー邸は1877年に立てられた5層の建物の改装建築である（1904年に市役所に築願いを提出）「色彩の輝きは生命の活力」（ガウディ）という主張のもと、ファサードは鱗のような瓦で、内部は砕かれたセラミックで装われている。丹下敏明は、ガウディがじつは「反復に基づいた経験主義者なのである」（丹下[1978]）と分析している。玄関から各階の内装は曲線でひとつとして同じ形態がない。「自然に直線はない」というガウディの主張そのものであるが、使われる多様なデザインモチーフは海底洞窟を思わせ、屋上に至る光の乱反射など目くるめく展開で時を忘れさせる。かつて筆者は写真家、田原桂一¹¹⁾の一枚の写真に出逢い衝撃を受けたものだが、その写真は紛れもなくこのパトヨー邸の主サロンの天井であった。階段室のタイルのグラデーションなど、ここでもガウディの科学的創造性が発揮されているが、これ以外にも天井照明などルーチョ・フォンタナの「引き裂かれたキャンバ

11) 1951年京都生まれの写真家で、1972年劇団のEU公演に同行し渡仏以来独特の光を捉える作風で知られ、1989年、光の彫刻なども手掛ける。

写真7 パトヨー邸の大サロンの天井



写真8 ミラ邸の屋上煙突



ス」¹²⁾を彷彿させる意匠が採用されて驚かされる。

この館はかつて許可なしに入場ができなかった。現在、民間の運営体が管理・公開しており、そのために入場料は17.8ユーロと高い。グエル公園にも見られるタイルのモニュメントがこの館のバルコニーにあるが、修復のためタイルを一枚一枚トレースしている場面に出くわした。さらに、先の大サロンは喫茶のスペースに開放されている。有機的の曲線を持つ木製の椅子にも自由に座ることができる。ミュージアム化による公開の効果は大きいのである。

5.3 ラ・ペドレラ（ミラ邸）

カサ・ミラ邸は石切り場を意味する「ラ・ペドレラ」と現地では呼ばれている。ペドロ・ミラ氏によってガウディに発注された建物で、最上階はガウディの建築に関するミュージアムとなっている。屋上には多くの不思議な煙突がそびえ、ジョージ・ルーカスのスターウォーズのモチーフにも使われていることで有名となった。住宅として建築されたが、その後店舗、商社、バー、学校、領事館などに使われてきた。うねった彫刻的ファサードは拡張地区のグラシア通りでひととき目を引く建物である。1909年に、宗教建築とみなされアナーキストたちに焼打ちにあうことを恐れたミラ氏は、ガウディに設計変更を求めたといわれている。当初ガウディは「バルセロナにモニュメントが欠ける」として聖母像と塔を計画していたのであった。

12) 色彩と静的な形態を主とする既知の芸術を放棄し、時間と空間の結合に基づいた芸術の展開を主題とする「空間主義」をうち出したイタリア人の芸術家（1899-1968）

5.4 グエル別邸の門扉

マヌエル・ジローナ通りから入った閑静なところにグエル別邸がありこの門がある。カタルーニャの伝説を生きる龍のデザインであり、ダダイズムの手法とアールヌーボーの結合した様式といえる。この門扉の大きく口をあけた龍の圧倒的造形に出会う時、ガウディのデザイン本質を美学的視点だけで解釈しようとする者は足元をすくわれる。この突然変異的な造形と意匠は、類似のものがない。調べてみると、ガウディの使うさまざまな様式デザインには、時々施主との関係も影響し、表現主義的な意味で一貫性があるわけではない¹³⁾。社会的、政治的・経済的状况で様式が採択されているからである。

5.5 サグラダ・ファミリア教会

未完成のままユネスコの世界遺産（地下聖堂と生誕のファサード部分）に2005年選ばれたサグラダ・ファミリア教会は、今もバルセロナのシンボル、アイコンとして君臨する。1883年に建設が始まり、ガウディの未完の建造物としても名高い。完成の見通しがつかない永久運動にも見えることが人々のロマンを掻き立てた。過去形で表わすのは、毎年の入場料など建設資金が潤沢になり始め、2020年には完成といううわさも聞く。年間200万人の観光客を集めるサグラダ・ファミリア教会は、入場料だけでも推計で20-30億円を稼ぎだす観光の目玉であり、都市の重要な観光・経済資源となっている

写真9 グエル別邸・龍の門扉



写真10 工事中のサグラダ・ファミリア教会



13) ガウディは「様式の誕生は単に幾つかの美学的理念の所産ではなく、それを結果とする政治形態、社会体制に、そして反映に由来する」(丹下 [1978], 12) と述べている。

のである。

筆者は当初、バルセロナに、対比が際立つ都市として「コントラスト・シティ」と表題を与えていた。サグラダ・ファミリア教会を見ても、東側の「生誕のファサード」と西側の「受難のファサード」に非連続な対比がある。音楽に喩えれば生誕のファサード＝バロック音楽、受難のファサード＝現代音楽というイメージである。絵画に喩えれば、具象彫刻で固められている生誕のファサードと、キュビズムまたは現代彫刻ともいえる受難のファサードの対比は同じ建物とは思えないほど差異がある。ガウディ建築群は、バルセロナにおいて「醜悪な悪趣味」とみなされた時期が長く続く。小説家ジョージ・オーエルは「世界で最もおぞましい建築の1つ」と評した。サグラダ・ファミリア教会は「時代の遺物をつくる」という冷めた見方が多かった。これを再評価したのは、サルバドール・ダリといわれるが、ダリも「美術史における最も独創的で最も常軌を逸した錯乱的なアール・ヌーボー建築」という、ほめ殺しのような批評であり、本格的な評価はアンフォルメル¹⁴⁾の現代美術家アントニオ・タピエスを待たなければならなかった。その後日本で初めてガウディを紹介したといわれる建築家、今井兼次(1953-1987)の努力などで1980-90年代のガウディ再評価が大きな意味を持ったことは否めない。

この教会にはバルセロナを象徴する多くのコードが埋め込まれているが、カトリックの総本山バチカンからは異端の教会として長らく見放されてきた。最近になって教皇ベネディクト16世が訪れ、ミサも行われ、バシリカとしてその地位が認められるようになった。しかし、ガウディの精神は別の所にあったように思われる。ミラ邸の挫折(設計変更させられたこと)からサグラダ・ファミリア教会に傾倒することになるガウディは、世俗的生活から離れ教会の建設に帰依することになる。風体をとがめられ警察に尋問された際に、禁止されているカタルーニャ語で通し勾留されたという事実からも、並々ならぬカタルーニャ主義がガウディのなかにあったと見るべきで、カトリック教というよりは「カタルーニャ教(筆者の造語で、もちろんこのような宗派はない)」に帰依していたのではと思うほどである。「カタルーニャ教の総

14) アンフォルメルとは、非定型的な芸術(Art informel)を指し、1940年代から50年代にかけてフランスを中心とするヨーロッパに現れた抽象表現主義。タピエスの評価の背景には、日本の評価が大きな影響を与えたといえることが出来る。

本山」がサグラダ・ファミリア教会なのではないかというのが筆者の解釈である。

都市のアイデンティティはその都市を特色づける伝統や文化、そして1人の人物（ガウディ）の魂のなかにも隠されている。

5.6 ピカソ

バルセロナと深い関係にあるもう1人の偉大な芸術家は、スペインのマラガ（アンダルシア）生まれでパリで活躍したピカソである。ピカソの幼年期のアカデミックな絵画から「青の時代」晩年期までの絵画コレクションがバルセロナのピカソ美術館に収められている。建築士会の壁画を残すなど市に貢献したほか、ピカソの芸術的基礎を育んだ町がバルセロナである。闘牛のピカドールに憧れていたピカソは、〈ゲルニカ〉にも闘牛における雄牛や馬を登場させている。悲劇を象徴する馬はピカドールの馬に例えられている。また多くの絵画に繰り返し描かれる雄牛は、ピカソのイメージの根源となりピカソ「らしさ」をつくっている。擬人化されたそれらの馬や雄牛は人間の強さや弱さの象徴として描かれており、生活のすべてを教会建設に捧げたガウディとの比較でいうならば、ピカソは世俗的な生き方を含めガウディとまったく異なるベクトルを持つ芸術家である。

この他ジョアン・ミロ、サルバドール・ダリなどバルセロナを代表する芸術家は数多い。ここに見る共通の何かが存在するとすれば新奇性ともいえる強烈な色彩感覚と強いコントラストである。加えて「モビーダ」と呼ばれる「揺れ動く」心とでもいふべき精神の存在であろう。ミロの原色のオブジェ



写真 11 ピカソの壁画

とモビール、ダリの夢と超現実に見られる情動、いずれも対極的な色や感情が交錯し、異種の才能に目がくらむ思いがする。

6 バルセロナの都市計画

近年、バルセロナ市の都市計画が注目されるようになっていく。『日経アーキテクチャー』（2010. 4-12号）の海外都市ルポにバルセロナ市が特集で組まれ、伊東豊雄のトーレス・ボルタ・フィラほか現代建築が紹介されている。

バルセロナ市の都市計画の5つの指針について、伊東豊雄建築設計事務所スタッフはつぎのように分析している。

- ①高密度の都心を東西両隣の市に機能分散させる、
- ②都市の再編で旧来の市域の公的機関の買収による公共施設化、
- ③鉄道や道路の地下化による地上都市アメニティの向上、
- ④時間をかけた拡張地区の改良や旧市街地の広場や遊歩空間の整備、
- ⑤エコロジカルなネットワーク化のための貸自転車システムの導入¹⁵⁾

以上は、ハード面の現象に特化した総括として筆者は的を射たコメントと思うが、文化的側面の分析が抜けていることが残念である。

6.1 再構築プロジェクト成功の鍵

文化芸術の「創造性」を牽引力にして都市の活性化を図り市民生活の豊かさを実現するという「創造都市」の考えは、米国やEU、アジアで違いがある。ここでは横浜市がナショナルパーク構想を構築する際に「文化芸術・観光振興による都心部活性化委員会（2006）」によって出された指針を基に考察してみたい。成功モデルとなる都市政策の共通項目としては以下の5点に集約される。

- ①都市としてのビジョンを打ち出す
- ②新たな価値観の導入・多様な取り組みを統合する

15) なお筆者が調べたところ、⑤のシステムは開設当初登録率60%の人気であったが現在は40%にとどまっている。理由は「坂道がきつい」、「ステーションの偏在」などで、自分の自転車の方が便利という都市事情によるものであった。パリ、ナント、モンリオールでもこぞってこのシステムを導入しているのだが、これだけはバルセロナ市にあまり適していないシステムと感じられた。

- ③強力なリーダーシップ・効果的な推進組織を持つ
- ④シンボリックな施設・機能・活動を導入する
- ⑤魅力的な世界発信を生み出す仕組みづくり

この指針を援用してバルセロナ市にあてはめ分析してみると、5項目のなかで②「新たな価値観の導入・多様な取り組みを統合する」が最も重要な項目であると筆者は考える。

バルセロナの場合、A.旧市街地区の「エスポンハミエント」手法による緩やかな地区再生、B.拡張地区（新市街地）の改良とモデルニスモの再評価、C.新興都街地区のダイナミックな都市改造プロジェクトという3つのエリアごとに戦略的な政策が採用されている。この同時にすすめられている3つの政策があることをおさえておく必要がある。

またこれには19世紀のモデルニスモの運動体験が今日の新市街地のイノベーションの方法論に活かされている。旧市街地に対しては、再生のための風通し「エスポンハミエント」ともいうべき旧建物の間引きや転用の方法論が使われている。拡張地区に対しては、「ミュージアム化」という価値向上の対策が採られている。

筆者が先に述べた文化政策のコンセプトが、このようにビルトインされていると考えられるのである。施策を実行する際もアングロサクソンの合理主義をあえて採らずに、結果としてカタルーニャ主義またはスペインの生活スタイルを重視したバルセロナ独自の価値観に裏打ちされた手法が使われている。

①「都市としてのビジョンを打ち出す」に関しては、下記の都市計画の沿革に見られるように、バルセロナ市は19世紀にはすでに都市計画が行われ、独裁政権時代にも市街衛生改善計画やラバル地区の開発プランの取り組みが見られる。

「バルセロナ市の都市計画の沿革」は次の通りである。

- 1859年 バルセロナ拡張計画。
- 1934年 旧市街衛生改善計画。
- 1940年 旧市街地の過密化（-50年中）。
- 1959年 再開発プラン（ラバル地区）。

- 1976年 大都市圏プラン（PGM）の策定。
- 1985年 再開発プラン（PERI）。
- 1986年 協議地域（ARI）の指定。
- 1988年 開発公社の設立。

しかし民主化以前のバルセロナ市は、住環境の悪化、インフラ不足、住民の高齢化や失業率の悪化、社会階層の変質が見られ、歴史性を無視した都市計画道路と、計画の遅れによる不動産の維持管理を放棄することによる建造物の荒廃が進行していた。加えて、不法滞在住民の流入によって地区全体がスラム化するという悪循環も見られたのである。都市計画が本格化したのは、民主化以降の76年大都市圏プラン（PGM）の策定以降ということになる。

③の「強力なリーダーシップ・効果的な推進組織」に関しては、先述したバルセロナ市都市計画局長ボイガス氏という先見的なアイディアを持つ人物がいた。彼は、「バルセロナの再建」（1985）において、「プランからプロジェクトへ」、「成長主義から都市の再構築へ」という都市計画思想を提唱たとされている。

④「シンボリックな施設・機能・活動を導入する」という項目では、ラバル地区の現代美術館や現代文化センター、公立図書館など旧市街地のなかの現代建築が当てはまる。

6.2 市再生の手法としての「エスポンハミエント」

ここでバルセロナ・モデルともいわれる都市再生の重要なキーワードである「エスポンハミエント（esponjamiento）」について、もう少し詳述しておきたい。これはバルセロナの旧市街地の地区再生に広く適用されている手法である。旧西ドイツなどでも見られたが、バルセロナ都市改造を特徴づける方法論として注目されている。

この言葉は、直訳すれば「緩和する」であるが、人によって「スポンジ化」（太下 [2008]）、「多孔質化」（阿部 [2009]）、「穿孔化」（矢作 [2009]）などと意識されている。分かりやすく説明すると街区の「風通しを良くする間引き」施策ともいえる。中国などに典型的に見られた強権的かつ急激な都市の「スクラップ&ビルド型」や「クリアランス型」の手法によるまちづくりとは異なり、よりスケールの小さな公共空間を重視して、広場、街路、遊歩道、公園

写真 12 ラバル地区の彫刻(左)と落書きの壁(右)



の整備を優先するところにその眼目がある。

地区再生にあたり、現存する建物を再評価し、壊す建物と再利用する建物を選別する。市が少額の補助金を出し、カフェなどを誘導する。できるだけ既存の病院、修道院、工場などの建物を保全、再活用し、現代美術館、図書館やデザインセンターなどの公共施設を入れていく。また、遊歩道空間でのフェスティバルを開催するなどして、人々を集客する。それらを通じて次第に治安が回復し、周辺のあらわになったファサードが化粧直しされ、空き部屋が埋まっていく。こうした街区の再生が隣の街区に波及していく。穏やかな再生手法といえるのである。住民を一举に追い出すということのを避けて、ゆっくり時間をかけて変えていこうとする姿勢がここにある。

矢作弘は、こうした「都市空間に穿孔」する計画手法を「部分から全体へ」、あるいは「ミクロの都市計画」と呼び、都市再生のバルセロナ・モデルと称している。歴史性を無視した都市計画道路を、あえて旧市街地で無理に貫通させるのではなく、都市のヒューマンスケールの街区を大切にアメニティを向上させていく。エドゥアルド・チジーダの壁画やフェルナンド・ボテロの巨大猫の彫刻が街区の個性化に役立っている。そうした成果の積み重ねで「部分を全体の戦略にしていく手法」が採られているところに、バルセロナの独自性を見ることができるのである。

このように、新市街地のダイナミックな開発戦略と旧市街地に見られる居住環境の回復を軸に、官民協働で小空間・街路・広場などのきめ細かな改善に取り組み、街が改善されていく。単に観光地化のための歴史保全でもなく、民間に丸投げの開発、商業化でもないバルセロナ独自のまちづくりが進んで

いる。

ところで、NYのソーホー地区などに起きた「ジェントリフィケーション (gentrification)」¹⁶⁾ は、この地区ではあまり課題となっていない。その理由は、①改造のスピードをコントロールしている、②ブランド街区が拡張地区にすでに張り付いている、③商業と住居の混在型のまちづくりの伝統があるなど、米国(＝アングロサクソンの合理的な合理主義)とは事情が異なることにあると思われる。実際にラバル地区にはオペラハウスもグエル邸もあり、貴賤の混交がここでも見られる。

7 移民政策とクレオール主義

スペインの移民の急増が特筆されるが、とりわけバルセロナの移民の増加も顕著である。多文化社会における犯罪の多発や治安の悪化など陰の部分を抱えながらも、移民はプラス的作用をバルセロナにもたらしている。モロッコ人、エクアドル人、ルーマニア人の順に多く、単なる出稼ぎではなくバルセロナに定住し、その活発な活動によって経済の活性化に寄与している。また、経済面で新たな需要と雇用を創出し、経済成長の好循環をもたらしている。それは、雇用が増え、「22%あった失業率が8%に改善したという事実」(中川 [2010])にも現れている(一般にいわれるように、移民の流入によって既存の仕事が奪われているわけではない)。その背景には、潤沢なEU資金が成長率の高いスペインに集中して投資が投資を呼ぶ循環が起きたこと、また観光面での魅力の増加が、EU各都市から週末観光の誘客に成功したことなどがある。こうした経済環境に加えて、生活環境面でも、フランコ政権時代の唯一の善政といわれる医療費の無料化が今も続いていること、また近年の就労規制の緩和策などが、移民増加に寄与しているものと考えられる。

7.1 混血・混交のクレオールシティ・バルセロナ

さらに、視点を変えれば、映画に象徴されるイメージ戦略がプラスに働いているともいわれる。バルセロナを舞台とした映画「ガウディ・アフタヌーン

16) 都市において貧困な層が多く住む停滞した地域(インナーシティなど都心付近の住宅地区)に、比較的豊かな人々が流入する人口移動によって家賃や地価が上昇する現象。

ン」や「それでも恋するバルセロナ」¹⁷⁾などに見られる人間模様は、バルセロナの懐の深さと多文化共生の気分にあふれている。こうした経済と文化が統合して好循環につながっているのではないか。バルセロナには、さまざまなバックグラウンドを持った多様な人々を納得させる息の長い施策遂行の姿勢と、多文化主義になじんだ文化政策があるといえよう。こうしたことから、筆者はバルセロナに「クレオールシティ」と名づけたい。

8 都市分析のための方法論

都市の経済構造に対する文化構造の重要性を指摘するために、都市を分析し解説していく方法論についてひと言述べておきたい。

都市の生成・衰退を説くルイス・マンフォード [1974] など、都市を1つの生命体とみなす考えがある。都市を分析するための文化的基層を探索する方法は種々の方法が考えられているが、筆者はユング分析心理学の援用を考えてみたい。都市の文化基層を探る旅は、筆者にとって街歩きの楽しみとも重なるのであるが、同時にその都市が今後どのような方向に発展あるいは衰退するのかを占う重要な指標となると考えている。この探索は、都市の持つ潜在力の源を突き止めることでもあり、現在行われている施策が有効に機能するのか、計画中の施策の成否を判断する材料でもあると考えるのである。

「都市の文化的基層」を探る方法は、都市の表の顔に対する心の部分を対象に、都市のなかにある集合無意識¹⁸⁾を探ることにある。いい換えれば、都市の象徴となっている建物や文化芸術の背景を調べ、そこに流れている血脈、あるいは埋め込まれたコードは何か探索することである。時を遡り伝統の流れをつかむ、その先に現れる原初の形態を見極めることが出来ればよい。

この方法論は、マルクスの歴史的下降分析や経済の下部構造論とはおのずから異なるものである。マックス・ウェーバー (1864-1920) などを源流とする。佐々木雅幸らの文化経済学に立脚しながら、都市の下部構造として文

17) 「それでも恋するバルセロナ」(Vicky Cristina Barcelona) は、2008年公開のアメリカ・スペイン合作映画。ウディ・アレン監督・脚本作品。第61回カンヌ国際映画祭特別招待作品として上映。第66回ゴールデングローブ賞作品賞。

18) ユング学派の分析心理学の分析手法を都市に当てはめ、「都市の集合無意識」を探る方法と考えてもよい。

化的核心を捉えることにある。この文化基層を形成している文化のコア、都市のアイデンティティ、古層を成す考えや形や物語が必ずあるはずである。たとえば、ナント市民にはジュール・ベルヌの冒険物語が多くの人々の心のなかに宿っているが、こうした物語の存在解明である。社会変化を俯瞰的な視点でとらえ都市の輪廻転生を説いているルイス・マンフォードの都市論では、都市課題（メトロポリス的秩序の死せる形式からの脱却）に対して「その残存エネルギーを真の美点の社会的利用に集中すること」（マンフォード [1974] 305）が重要と述べている。この「真の美点の社会的利用」が都市の「文化的基層」にある核心を政策に翻案し展開することと通じる。都市の変化をうながす動力学の起点となるという考えである。

こうしたうえで、バルセロナの文化的基層を分析していくと、「ガウディというコード」という答えにたどり着く。このコードにはムンタネル、ガダファルクもミロやダリ、フィラタワーの伊東豊雄さえも含まれる。ガウディの奇抜な意匠に目を奪われがちだが、そうした表層を超えて、ガウディに象徴される科学的創造性、独自の審美眼を持って異種なものを躊躇なく取り込む方法が、「ガウディというコード」に他ならない。このガウディなる〈もの・こと・手法〉に照らして、バルセロナを解読していくことで都市の姿がくっきり見えてくるのではないだろうか。



写真 12 ランプラス通り

9 あとがきにかえて

筆者が初めてバルセロナを訪ねたのは、第45回のマリア・カナルス・バルセロナ国際音楽コンクールの視察であった。1999年4月のことであり11年前である。当時のバルセロナはゴシック地区にしても拡張地区にしてもそれほど賑っていたわけではなく、落ち着いた佇まいであった。現在ゴシック地区を南北に貫くランブラス通りは、いたるところでパフォーマンスが行われ、テラスの飲食ゾーンは常に満員であった。今回の調査で大いに驚いたのは、その活況とパフォーマンスの種類の多様さである。人込みは、仙台の定禅寺ストリートジャズフェスの3倍ほどで、毎日夜中の12時過ぎまで喧騒が続くのが夏のバルセロナの現実である。20年前からバルセロナに滞在する知人の話によれば、こうした活況は10年前からだという。

ガウディの内装で知られるカサ・カルベという店でクレマ・カタラナ（カタルーニャ風クレーム・ドゥ・プレ）を食べてみる、そこで思うことはこの地のライフスタイルである。午後の3時から6時のシエスタを中心に、夏場はとくに午前第1部と夜第2部の生活が歴然と分けられ、一日を2度生きる感覚である。一日5回の食事時間と長い夜、人生を楽しむ時間の大切さを老若男女市民全体が味わっている。またこうしたライフスタイルにあわせたインフラやソフトが豊富に用意されている都市がバルセロナである。

創造都市の指標にR・フロリダが寛容性を掲げているが（フロリダ[2008]）、このやや上から目線の寛容性という指標はバルセロナにとっては遠い過去のものと思えてくる。なぜなら、移民の受け入れが目立つ今日だが、遠くはローマ時代より、レコンキスタ以降もイスラム、ユダヤ、カトリックの混在が示すとおり多くの混血・混合が繰り返され、寛容というより異種交配というクレオール主義が日常であった。こうした精神風土が何の違和感もなく外国人が溶け込める都市の居心地の良さを醸し出しているような気がしたのである。

参考文献

阿部大輔 [2009], 『バルセロナ旧市街の再生戦略——公共空間の創出による境界の回復』学芸出版社。

- 今福龍太 [2003], 『クレオール主義』 ちくま学芸文庫.
- 遠藤陽子 [2009], 「短期海外研修視察報告」.
- 太下義之 [2008], 「創造都市バルセロナの文化政策」『季刊政策・経営研究』 vol.1, 2008 年.
- 大場登著 [2003], 『ユング心理学』 放送大学教育振興会.
- 北川宗忠編 [2004], 『観光文化論』 ミネルヴァ書房.
- 澤井聖一編 [2004], 『GAUDI ガウディが知りたい!』 (株) エクスナレッジ.
- 外尾悦郎 [1985], 『バルセロナ石彫り修業』 筑摩書房.
- 丹下敏明 [1978], 『ガウディの生涯』 彰国社.
- 中川功 [2010], 「移民受け入れ先進国となったスペインの移民政策と経済成長」『経済志林』 第 77 巻第 4 号, 法政大学経済学部学会 pp.201-219.
- 中山公男ほか著 [1984], 『ガウディをく読む』 現代企画室.
- 『日経アーキテクチャー』 2010. 4-12 号.
- フロリダ, R., 井口典夫訳 [2008], 『クリエイティブ資本論——新たな経済階級の台頭』
ダイヤモンド社.
- マンフォード, ルイス, 生田勉訳 [1974] 『都市の文化』 鹿島出版会.
- 矢作弘 [2009], 「都市再生と創造」 URP GCOE DOCUMENT 4, 大阪市立大学都市研究
プラザ.
- The Barcelona city council [2006], *Barcelona Strategic Plan for Cuture New Accents.06*.
- Lluís Tolosa (Shigeo Suzuki) [2001], 『Barcelona. Gaudi とモデルニスモのルート』
Kliczkwski.

ウェブサイト

- バルセロナ観光 www.barcelonaturisme.cat
- バルセロナ市役所 <http://www.bcn.cat/english/ihome.htm>
- 22@バルセロナ <http://www.22barcelona.com/>
- バルセロナメディア <http://www.barcelonamedia.org/>
- バルセロナ現代文化センター <http://www.cccb.org/en/>
- 横浜市 www.city.yokohama.lg.jp/shimin/bunka/iinkai/.../nap-shiryoku-06-1-2.pdf